横浜の空襲体験記をめぐって

空襲体験記

横浜の空襲に関するまとまった証言としては、『横浜の空襲と戦災』（横浜市、一九七五年～一九七七年）編集の際に寄せられた体験記をまずあげねばならないだろう。

「1体験記編」に二六二編が掲載された他、「2市民生活編」に九編、さらに補遺として『調査概報』第五集（一九七六年）に一一九編が掲載されている。これらには、空襲の体験だけでなく、学童疎開や学徒動員、戦時中の軍隊・官公庁・工場・町内会などの様子も描かれており、空襲と戦争に関する貴重な証言となっている。

『横浜の空襲と戦災』刊行後も、同書編集を担った横浜の空襲を記録する会をはじめとした様々な市民団体が毎年、横浜の空襲に関わる証言を掘り起こしている。その成果は、たとえば小野静枝・手塚尚編『伝えたい　街が燃えた日々を』（横浜の空襲を記録する会、二〇一二年）などとして刊行もされている。また、新聞等でも様々な証言が繰り返し紹介されている。

空襲や戦争の体験記には体験者のみが語ることのできる真実が含まれている。一方、体験記には、自身の体験の他に伝聞情報が含まれている場合がある。そのため、伝聞に基づく誤解がそのまま記されていることもある。しかし、体験記は、必ずしも客観的な事実を確定することだけが目的ではなく、体験者個人にとっての真実を伝えることに大きな意味がある。したがって、体験記のなかに伝聞に基づく誤解が含まれているとしても、その体験記の価値が失われるわけでは決してない。

ただ、客観的な事実の確定に体験記の記述を生かそうとするときには、他の記録との突き合わせが不可欠である。そのことによって体験記のまた違った意味が見えてくるはずである。

これまでも空襲に関する様々な文献で、こうした体験記・証言が取り上げられている。東京大空襲の実際を米軍資料に基づいて再現した奥住喜重・早乙女勝元『東京を爆撃せよ』（三省堂、一九九〇年）においては、米軍の作戦任務報告書の記述に対比させる形で体験者・目撃者の証言が紹介されている。また、横浜における空襲を体系的にまとめた今井清一『新版　大空襲5月29日』（有隣新書、一九九五年）では、公的な記録に加えて多くの体験記に空襲の実際を語らせている。

一般の市民が暮らす市街地に対する爆撃の凄惨さは、体験記が最も切実に語るところである。また、その焼失面積や、死者数四六一六人（『横浜市戦災復興誌』横浜市建設局、一九六一年）という数字も、被害の深刻さを物語るものである。（ただし、死者数は警察の公的記録に基づくものであり、実際はさらに多数にのぼる可能性が高い。）

今回は、空襲の被害に関する証言は体験記本文にゆずり、空襲の基本的な事実を確認するために、『横浜の空襲と戦災』『調査概報』に掲載された体験記から、爆撃の実際に関わるいくつかの証言を取り上げてみたい。

爆撃目標

空襲に関して最もよく流布されている説に、占領軍が利用するために目標からはずした、あるいは高射砲など軍事施設があったためにねらわれた、といった爆撃目標に関する諸説がある。

この点については、実証的に明確な議論がなされてきているわけではない。しかし、作戦任務報告書など米軍資料が次々と公開されてきているなかでも、特定の目的のために特定の建物や区域を目標からはずしたとする資料は見つかっていない。

日本に対する爆撃には、大きく分けて二種類がある。中島飛行機武蔵製作所のような軍需工場を目標とする通常爆弾による精密爆撃と、ある程度の人口密度の市街地を面的に目標とし、焼夷弾だけか通常爆弾との混合で行う都市爆撃の二つである。東京大空襲・横浜大空襲は、都市爆撃に該当する。いずれの場合も、目標がとらえられなかった際には臨機に目標を変更して爆撃するなど、爆撃の実際は必ずしも特定の目標だけを正確にねらったものではなかったことが明らかになりつつある。

しかし、後に占領の拠点の一つとなった横浜に関しては、港湾部や山手地域をあえて目標からはずしたという説が根強くある。これに関して手塚尚氏は、結果として燃え残ったことからの類推であろうと述べている（『伝えたい　街が燃えた日々を』まえがき）。

山手地域の一部は、人口が希薄で、住宅の密集度も低かったことから、米軍が設定した焼夷弾攻撃地域から外れていた（左図および『新版　大空襲5月29日』九七ページ掲載図参照）。だが、はみ出し爆撃がなかったわけではない。おおむね、手塚氏の主張通りというべ

写真1　B29がとらえた根岸・本牧方面の空襲の様子
1945年5月29日　根岸競馬場と根岸海岸の他はすべて煙に包まれている。　横浜の空襲と戦災関連資料

きだろう。

さらに特定の建物を目標からはずしたという説もあるが、当時の爆撃の精度から見ても無理があり、またそのような意図を米軍が持っていたという資料もない。

では、特定の建物や施設を目標にしたという説はどうだろうか。体験記を読んでいると、何人かが高射砲陣地がねらわれたと書いている。単に目標とされたにとどまらず、高射砲陣地をねらうためにわざわざ大型焼夷弾を投下したという噂があったと証言している人もある（「体験記編」一五三・一六五ページなど）。

特定の目標をねらった精密爆撃であれば別だが、横浜大空襲のように焼夷弾だけで行われた都市爆撃は、そもそも高射砲陣地や特定の軍事施設を破壊することを目的としていない。

もちろん、都市爆撃においても目標ポイントは設定される。五月二九日の横浜大空襲では、五つの地点が目標（平均弾着点）として各部隊に与えられた。しかし、これもそれぞれの地点だけをたたくことが目的なのではない。地図上で、東神奈川駅・平沼橋・吉野橋・大鳥国民学校の四つの目標地点をつないでみると、ほぼ半円形になり、その中心にもう一つの目標地点港橋があった。この半円のなかの市街地を焼きつくすことが、この日の目的だったのである。実際の焼失地域も、ほぼ一致している（写真2・図参照）。死者は三六四九人にのぼり、市内の空襲としては最大の被害となった。

また、証言にあった大型焼夷弾はM47のことであると思われるが、横浜大空襲では全投下焼夷弾の三分の一近くがM47で、部隊によっては半分を占めていた。そのことからも、M47が特定の目標だけをねらったものとは考えにくい。あくまで、その着火性の良さを生かしてM69という小型焼夷弾との組合せで投下されたものであった。

このように市街地を面としてねらう都市爆撃で、点である高射砲陣地だけをねらったというのは考えにくい。高射砲陣地の場所を米軍が把握していたとしても、侵入経路等で考慮することはあっても目標とはしていなかったと考えてよいのではないだろうか。

機銃掃射

ただし、東京の空襲の際、B29の機銃が高射砲陣地をねらって撃ったという証言がある（『東京を爆撃せよ』八〇ページ）。これは、主に夜間爆撃において照空灯をねらったもののようである。昼間の爆撃である横浜大空襲においても、B29が地上を機銃掃射したという証言が、体験記のなかに二編ほどある（「体験記編」一五〇・一九九ページ）。艦載機やP51など小型機の機銃掃射は、頻繁にあったことがわかっている。しかし、B29から直接地上に向かっての機銃掃射があったかどうかは議論が分かれるところである（『空襲通信』第一六号、空襲・戦災を記録する会全国連絡会議、二〇一四年）。

三月一〇日の東京大空襲の爆撃高度は二〇〇〇メートル前後、五月二九日の横浜大空襲では六〇〇〇メートル前

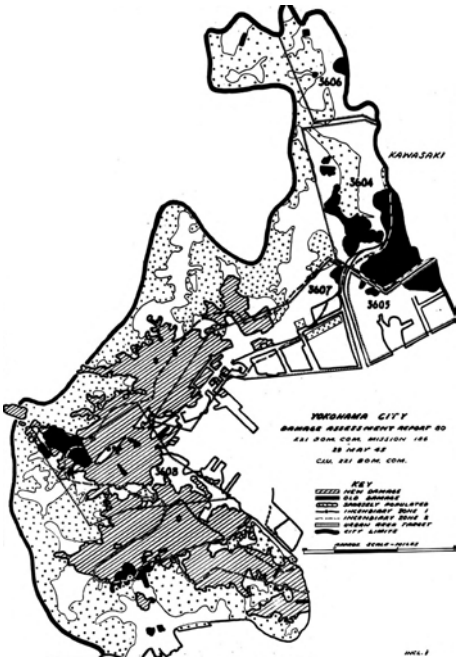

図　横浜の空襲焼失区域　1945年　斜線部が5月29日の焼失区域、黒がそれ以前、点の区域は人口希薄地　米国国立公文書館所蔵

写真2　横浜大空襲における目標（平均弾着点）を示す航空写真　1945年　○×などの記号と6けたの数字で表記されている。　米国国立公文書館所蔵

写真3　M69焼夷弾　38発を集束したE46集束弾として投下され、空中で散開した。長さ50cm、径8cm　横浜の空襲と戦災関連資料

写真4　M47焼夷弾　欠けた頭部を除いて長さ99cm、径20cm　本来の長さは120cm
横浜の空襲と戦災関連資料

後である。これだけの高度から、夜間爆撃での照空灯のように目立つ目標ならともかく、爆撃による煙が充満するなか、特定の目標をねらうことは難しかっただろう。

米軍の五月二九日の任務報告では、戦闘中の機銃発射弾丸数六万二〇〇〇発の他に、四万発以上の試射を行ったと記録されている（『横浜の空襲と戦災』4外国資料編）。戦闘中とは、日本の迎撃機に対する応戦であろうが、試射が意味するところは不明である。しかし、文字通りの試し打ちとしては弾数が多過ぎる。これが、地上への機銃掃射を含んでいる可能性は否定できない（『空襲通信』第一六号）。

以上のように、爆撃の目標については、米軍の記録に記されている以上に確かな根拠はないといえよう。都市爆撃について、米軍は建前として軍需生産の一たんを担う住・工混合地域をねらったとしているが、その実態は一定の人口規模の市街地を目標とし、国民の戦意喪失と労働力をそぐことをねらう戦略爆撃だったといえる（荒井信一『空爆の歴史』岩波新書、二〇〇八年）。

風聞と実体験

もう一つ、よく語られる風聞がある。爆撃の際、米軍が油をあらかじめまき、その後焼夷弾を投下したというものである。横浜の体験記では、複数の人が自身の体験としてガソリンあるいは重油をB29が撒いてから、焼夷弾を投下したと書いている（「体験記編」九〇・一〇三・一八〇ページ、「調査概報」一七ページ）。しかし、米軍の作戦任務報告書などを見てもこうした事実は記されていない。東京でも同様の証言があり、『東京を爆撃せよ』では、M47やM69など油脂とガソリンを混ぜたナパーム弾が破裂するとガソリン臭がするため、こうした風聞が流布されたのではないかと推測している。

横浜の体験記のなかには、総持寺にB29が墜落した際に、ガソリンを浴びたという証言もある（後述）。六〇〇〇メートルもの高度から意図的にガソリンや重油を撒くことは考えにくいが、焼夷弾のナパームが飛び散ったり、被弾したB29が燃料を撒き散らしながら飛行したことは考えられる。また、体験者の一人は、自身の体験として、空襲中に一過性の雨が降り、これをガソリンと思った人がいたと証言している（「体験記編」八〇ページ）。

横浜の体験記を見ると、東京の知人を通して、あるいは自身が東京からの疎開組であったりして、東京の空襲の経験が横浜にも広く伝わっていたことがうかがえる。したがって、自身が体験する前に聞いていた話しが先入観となり、実際の体験と混同したことは充分考えられる。空襲の混乱のなかで起きたことを、冷静に判断するのは困難であり、すでに得ていた知識や風聞を基に自らの体験を解釈したのもやむを得ないことであろう。

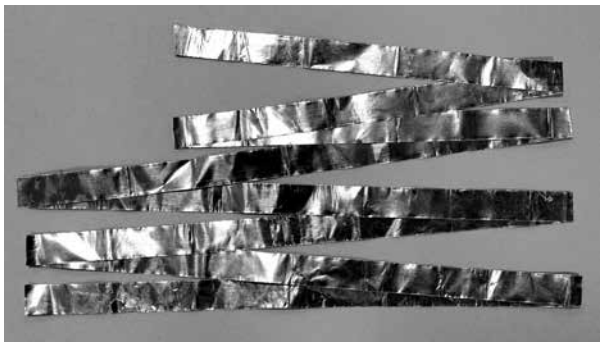

写真5　レーダー妨害用のロープ
元々はボール紙の芯に巻かれていたようで、80m～90mほどの長さがあったといわれる。　横浜の空襲と戦災関連資料

一方、体験記には、実体験に基づく貴重な証言も多い。たとえば、米軍がレーダー妨害用に撒いたロープに関して、焼夷弾に混じってアルミ箔のテープが「サラサラ」という音をたてて落下し、「大きな杉の木一ぱい銀のテープが引っかかった」という目撃談がある（「体験記編」四三四ページ）。他にも、電線にテープが引っかかっていたなどの証言がある。

これは、同じ電波妨害用でも短いチャフ（主にヨーロッパ戦線で用いられ、同じくアルミ箔製だが、形状が飼料用の切り藁に似ていたためその英語名で呼ばれた）でなく、アルミ箔製の長いテープで、広い周波数帯を妨害する効果が期待されていたという（『空襲通信』第一五号、二〇一三年八月）。拾われた現物も、残されている（写真5）。

B29の墜落

また、B29の墜落を目撃したという証言は意外に多く、墜落地点が不明なものも含めると一〇編以上の体験記が触れている。なかでも、四月一五日の空襲の際には、横浜市内への墜落について具体的な目撃証言がある。

日本空襲を行ったB29については、先に『市史通信』第一九号でも紹介し、その中でB29の損害をおおざっぱに三〇〇機以上が墜落、およそ三〇〇〇人の搭乗員が死亡または行方不明と述べた。ここで改めて、その数字について再確認しておきたい。

第二〇航空軍の「B29戦略爆撃作戦の概要」によると損失機数と犠牲になった乗員数（死亡・行方不明）は、中国成都に基地のあった第二〇爆撃機集団（一九四五年三月まで）が一二四機、乗員五一〇人、マリアナ基地に配備された第二一爆撃機集団（一九四五年五月以降第二〇爆撃機集団所属の部隊も合流）が三四三機、二四四〇人とされる。合計すると、四六七機の損失と二九五〇人の死亡・行方不明となる。

この損失機には戦闘任務中以外のものも含まれると思われるが、戦闘任務中に限ると四一四機損失という数字もある（「第二〇航空軍作戦概要」）。

マリアナ基地に配備されたB29は、五月段階で六五〇機前後（八月には八五〇機を超す）だが、その五割から六割以上が一たんは失われたことを意味

する。そして、これらの損失機を米軍は速やかに補充・更新していたということになるのである。

横浜の空襲では、四月一五日（出撃三三七機）に一三機、五月二九日（出撃五一〇機）に七機が失われている。五月二九日には市内への墜落がなく、証言も少ない。山手で火だるまのB29が本牧沖の海に墜落するのを目撃したという証言（「体験記」一六二ページ）があるが、米軍の記録と照合しても該当の機体は確認できない。別の日に東京湾に墜落したものか、房総半島への墜落かもしれない。この日は、P51戦闘機部隊が護衛についたためか損失が比較的少なかった。七機の内二機が千葉県、一機が静岡県に墜落、残り四機は帰途に八丈島・硫黄島沖など洋上で墜落または不時着水している。

一方、四月一五日は、東京南部と川崎を主目標とし、鶴見区も中心部が焼失、三四五人の死者を出している。この日、市内に四機、横須賀・江の島沖にそれぞれ一機、千葉県に二機、洋上に三機が墜落し、二機が硫黄島へ不時着大破した。この内市内の三ヶ所について、具体的な目撃証言がある。

鶴見区の男性は、B29が火だるまで総持寺の方へ墜落していくのを目撃し、さらにもう一機が川崎の臨港方面へ落ちていったとしている（同四二四ページ）。川崎市内ないしは沖合への墜落は確認されておらず、千葉に墜落した二機のうちのどちらかかもしれない。鶴見区のもう一人の男性は、B29が火を吹いて頭上に落ちて来て、総持寺の裏に火柱が上がるのを見たという。そして、墜落直前にB29からガソリンが降りかかってきたと証言している（同四二六ページ）。

この機体には一二人が搭乗していたが、全員死亡、総持寺の墓地に埋葬されたという（福林徹「東部軍管区に墜落した連合軍機と捕虜飛行士」）。

やはり複数の証言があるのが、捜真女学校周辺への墜落である。神奈川区松本町の女性は、B29が真っ赤に燃えながら家の前の山に墜落炎上するのを目撃した（「概報」一七ページ）。場所から推定して、捜真女学校周辺への墜落と思われる。当時の捜真女学校生徒の証言によると、機体の胴体は隣の畑に落ち、捜真の校舎には主翼が引っかかっていたという（『捜真―受けつがれるもの』捜真女学校同窓会、一九九七年）。神奈川区神橋国民学校に駐屯していた陸軍横浜警備隊の大隊長も墜落を目撃して、馬で駆けつけたという（「体験記」二六七ページ）。

写真6　B29の搭乗員ヘイル・クルー　機長ヘイル少佐率いるクルーで、11人が写っている。　山本博士資料

同機の搭乗員一二人の内八人が墜落死、パラシュート降下した四人も二人が全身火傷で死亡、残り二人は捕らえられて東京陸軍刑務所に収容されたが、五月二六日の空襲で死亡し、結局全員が亡くなっている（前掲、福林徹論文）。

戦場となった市街地

南区南太田への墜落では、日本人の犠牲が出た。中区宮川町の女性は、高射砲や戦闘機の迎撃の様子を見ていたが、その内一機のB29が真っ赤な火を吹き、火の玉のようになって井土ヶ谷方面に落ちていったと証言している（「概報」四四ページ）。また、井土ヶ谷の男性は二機のB29が撃墜されるのを目撃した。一機は保土ケ谷方面に墜落し、もう一機は南太田の山腹に激突したが、そこがたまたま防空壕の入口だったため、避難していた人々が亡くなった（同七八ページ）。記録によれば、このとき亡くなった市民は二五人だったという（福林徹論文）。

この機の乗員の内九人は墜落時に死亡、パラシュート降下した二人の内一人は大船捕虜収容所に収容され、戦後帰国、もう一人は東京陸軍刑務所で空襲にあい死亡した（同前）。

同刑務所で焼死した米兵は六二人に、および、戦後米軍は空襲時の捕虜の避難が不充分だったと追及もしている。また、B29搭乗員の多くが陸軍刑務所に収容されたのは、当時日本が彼らを捕虜ではなく、無差別爆撃を行った戦争犯罪人として扱ったからであった。

証言にあった保土ケ谷方面への墜落機は不明で、方向から捜真の可能性も考えられる。市内のもう一ヶ所の墜落場所である奈良町は、目撃場所から遠すぎるだろう。この機は田奈弾薬庫近くの山林に落ちたというが、目撃証言はない。この機の乗員の内一人は墜落時に死亡、パラシュート降下した一人は東京陸軍刑務所で亡くなり、結局全員が死亡した（前掲、福林徹論文）。

以上のように、撃墜されたB29の目撃談を見ると、空襲時には市民が生活する場所がまさに戦場になったのだということを実感させられる。体験談からは、一般市民が焼夷弾の落下と火災の中を必死で逃げまどい、その生死を偶然が支配するというような、過酷な空襲の現実が迫ってくる。

しかし、戦場には敵と味方双方がいたのであって、B29搭乗員の運命はその一方の現実を示している。結局、四月一五日、墜落した一一機（不時着陸を除く）の搭乗員一二五人の内生き残って帰国できたのは、たった三人だった（福林徹論文）。

付記：利用した米軍資料は、いずれも国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧することができる。

（羽田博昭）